令和２年度
「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた
教科別実践事業（国語）　授業発表会

全体会資料「研究の概要」

7月：3年「こまを楽しむ」(説明文)

9月：6年「やまなし」(物語文)

8月：4年「世界にほこる和紙」(説明文)

9月：2年「お手紙」(物語文)

目　次

Ⅰ　研究主題　・・・・・・　1

Ⅱ　研究主題設定の理由　・・・・・・　1
１、主題に関して　２、副主題に関して

Ⅲ　研究のねらい　・・・・・・　2
１、主題に関して　２、副主題に関して

Ⅳ　研究の見通し　・・・・・・　2

Ⅴ　研究の概要　・・・・・・　3

１、平成３０年度・令和元年度（一部、令和２年度を含む）　・・　3
(1)、「ユニバーサルデザインの視点における支援の工夫」の継続的な実践　3
(2)、「伝え合い活動」における実践　・・・・・・　4
(3)、「認め合い活動」における実践　・・・・・・　6
(4)、「深い学び」に向けた「振り返り活動」の充実　・・　7

２、令和２年度　・・・・・・　8
(1)、読み物教材における「指導事項の重点化・系統性」の整理　・・　9
(2)、「言葉による見方・考え方」の意味や必要性など　・・・・　１１
(3)、「文学的文章」における「言葉による見方・考え方」の把握・扱い　１２
(4)、「説明的文章」における「言葉による見方・考え方」の把握・扱い　１３
(5)、「必要感のある言語活動」の意味と具体化　・・・・　１４
(6)、「文学的文章」指導における「必要感のある言語活動」　・・・　１５
(7)、「説明的文章」指導における「必要感のある言語活動」　・・・　１６

３、まとめ　・・・・・・　１７

Ⅵ　校内研修の経過・研修に携わった教職員　・・・・・・　１７
１、平成３０年度　２、令和元年度　３、令和２年度　４、研修に携わった教職員

◇資料：実践記録集（指導案・研究紀要等）

・**資料１**：７月１３日(火)　３年生「こまを楽しむ」(説明文)
・**資料２**：８月３１日(火)　４年生「世界にほこる和紙」(説明文)
・**資料３**：９月　７日(火)　６年生「やまなし」(物語文)
・**資料４**：９月１６日(木)　２年生「お手紙」(物語文)

Ⅰ　研究主題

主体的、対話的で深い学びの実現に向けた授業改善
－「読み物教材」における言葉による見方・考え方を働かせた言語活動の工夫－

Ⅱ　研究主題設定の理由

１、主題に関して

本年度より、小学校では、新学習指導要領での学習指導が開始された。そして、その中心となる概念は、各教科の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、「主体的・対話的で深い学び」を実現することである。また、その学びの意図は、「生きて働く学力の育成」であり、主体的・能動的な学び手の育成にも通じていることは周知のことである。

実際に、生き生きと自ら進んで学習に取り組む児童の姿、仲間同士で話し合い・練り合いながら学習課題を解いていく話合い活動など、児童が変容・成長していく姿をみると、新学習指導要領が求めている趣旨や意義も良く理解することができる。

本校は、平成２９年度から本研修主題をテーマにして学習指導の工夫に取り組んできて４年目となった。平成２９年度に取り組んだ「特別支援教育エリアサポートモデル校」の指定研究における「ユニバーサルデザインの視点による授業」の良さは、継続されている。

また、平成３０年度の研修から取り組み始めている「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた指導の工夫については、２年間の研究で下記のようなことが明らかになった。

- 交流(対話)活動に「主体的に取り組む」ために、まずは児童一人一人が確実に自分の意見を持つことを土台として、それらを豊かに交流させていくことが大事なこと。
- 交流活動で対話を深めるために、「認め合い」をベースにした学習環境が必要なこと。
- 学習の「ねらい」と「振り返り」が連なる一貫性のある学習を展開することで「学びが深まる」こと。「振り返り」を共有することで、学習の価値が更に深まること。

これらのことから分かるように、学習指導要領が求める児童の姿は、簡単にはたどり着かないこと、時間をかけてじっくりと育てていかなくてはならないことも分かってきた。

しかし、確実に「主体性・対話的で深い学び」に近づいていると感じている。これらの２年間の取組(上記)が土台となり、本年度からま始った「国語の指導に焦点化した研究」(下記)へとつながっていく。なお、上記の内容全体が「主題」設定の理由となっている。

２、副主題に関して

本年度、教育事務所より「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた実践支援事業の指定校(１年間)を受けた。指定校の中心となる考え方は既に取り組んでいた内容であったので連続性を大事にした。しかし、「国語の指導に焦点化した研究」ではなかったため、研究は再スタートした部分も強い。そこで、まずは国語科の目標を確認した。

言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で正確に理解し、適切に表現する資質・能力を、次のとおり育成することを目指す。※以下省略

また、臨時休校期間中に開催した５月２０日の「要請訪問」では、国語の授業改善で大事なポイントを指導主事から教えていただいた。下記の２視点が大事なことが分かった。

・「言葉による見方・考え方」を高めることで「深い学び」につなげること。
・「必要感のある言語活動」を通して、学習のねらいの達成を図ること。

これらは、上記に紹介した国語科の目標とも合致しており、本校の方向性が絞られた。

また、限られた時間の中で研究の成果を明らかにするため、研究範囲(教材)を「読み物教材」に限定した。そして、中学年では「説明的文章」に重点を、高学年では「文学的文章」に重点をおくなど、二つの側面から学習指導の工夫・改善に取り組むことを決めた。

主テーマにある「深い学びの実現」を国語科(読み物教材)に置き換えると「深い読み取りの実現」となる。上記の事項を関連させながら、本年度の研究の中心が決められた。

・学習の中で扱う「言葉による見方・考え方」を明確にして重点的に扱うこと。
・学習活動は「必要感のある言語活動」として児童に分かりやすく提示すること。

また、このようにして決められてきた内容は、「副主題」設定の理由となっている。

Ⅲ　研究のねらい

１、主題に関して

・「伝え合い活動」と「認め合い活動」を土台として、児童の交流活動の活性化を図る。
・学習の「ねらい」に応じて、一貫性のある学習活動を展開するとともに、「振り返り」の場面では学習の有用性等に気付かせるなどして「学び」を深める。

２、副主題に関して

・読み物教材に視点を絞って整理した、学習内容の重点化・系統性（６年間）を基にして、児童に育成すべき「資質・能力」や「言葉による見方・考え方」を明らかにする。
・資質・能力の習得に向けた「必要感のある言語活動」をより効果的な活動として展開することで、読解力を高めるとともに、それらを生かせる言語能力を身に付けさせる。

Ⅳ　研究の見通し

・「伝え合い活動」「認め合い活動」を取り入れ、交流場面を生かしながらお互いの考えを深め合う活動を通して「豊かな表現力」を育成することができるであろう。
・「めあて」と「振り返り」の一貫性を高めたり、学習の終末場面において各教科の見方・考え方を深めたりすることで、一人一人の「学び」が深まるであろう。
・本時で高めたい「言葉による見方・考え方」を明らかにして重点的な指導を進めるとともに、６年間を通して系統的な指導を進めることで、国語に必要な資質・能力を高めることができるであろう。
・言語活動(読解活動)を考える上で、児童にとって分かりやすい活動を展開したり、児童の主体性を生かした活動を展開したりすることで、「必要感のある言語活動」につなげ、読みを深めたり読み取ったことを生かしたりすることができるであろう。

Ⅴ　研究の概要

１、平成３０年度・令和元年度（一部、令和２年度を含む）

（1）、「ユニバーサルデザインの視点（12の視点）における支援の工夫」の継続的な実践

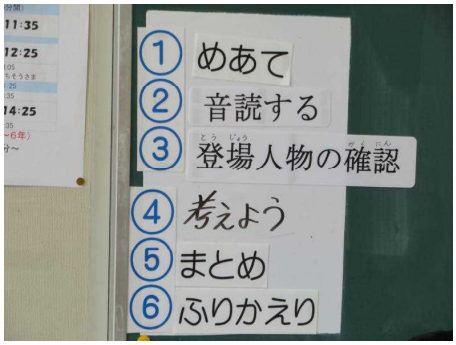
平成２９年度、本校は群馬県教育委員会から「特別支援教育エリアサポートモデル校」の研究指定を受けた。そして、その中心となる取組が「ユニバーサル・デザインの視点（１２の視点）に基づいた支援の工夫」である。その支援を工夫しながら学習指導を丁寧に進めることで「誰にも分かるできる授業」の実践化に取り組んできた。実際に、そのような工夫を取り入れながら個別の支援・指導を工夫することで、児童の学習に対する集中力や意欲は高まり、学習の理解度も高くなっていった。

このように、有効性が確認されている指導の工夫を続けることは大事なことであり、継続して取り組むことで「Ｃ小の授業スタイル」として日常化してきている。本年度も継続して実践している活動を紹介する。

①、「展開ボード」の活用

黒板の左脇にある「展開の概要」が目視（確認）できるボードのことを示している。本時の学習の流れがどのように進むのか、今はどの学習場面なのかなどを、児童が自分自身で確認できるものである。

１時間の内容を理解して安心して取り組めたり、今の活動が次の活動にどのようにつながっていくのかも確認したりすることができる。このようなことから、児童は安心して今の学習（作業）に集中して取り組むことができる。



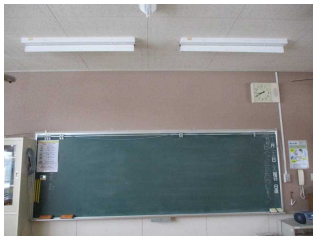
展開ボード(黒板の左上)

なお、この取組は下記の「UD 視点」を実践化しているものでもある。

> **UD(ユニバーサルデザイン)視点①**
> ・本時の初めに、学習の流れを提示し、見通しを持って取り組めるようにしている。

上記以外にも１１の視点があるが、色々な指導の工夫の中でその視点（有効性）を生かして継続して進めている。関係する実践例の中で説明していく。

②、「フロントゼロ」の配慮



教室の黒板の周辺には、余分な掲示物を貼らないという取組である。右の写真からも分かるように、児童の集中力を高めるため、黒板付近にある掲示物等を極力減らすように配慮されている。これにより、児童は黒板の文字や図式等に集中することができる。

また、板書の内容も学習内容を「構造化」した構成で展開・記述することで、学習の理解度を高める工夫にもつなげている。

③、「タイムタイマー」の活用

児童のある一定の「活動時間」を赤色の減量具合の目視で確認できたり、音で知らせたりする用具である。キッチンタイマーだと分かりにくい残り時間の確認がより分かりやすくなっている。

このタイマーの活用により、落ち着いて学習活動に取り組めることができるようになった。　　**※右では「残り8分」を表記中**

(2)、「伝え合い活動」における実践

交流活動(伝え合い活動)を活性化するためには、どのような指導の工夫が必要なのか。

児童の視線も踏まえて対話活動を見直すことで、幾つかの重要な事柄が分かってきた。５つの項目に分けて下記に説明する。

①、「交流場面（対話活動）」の設定と時間の確保等

当たり前の内容ではあるが、交流活動を充実させる上で、「児童同士の対話活動・教師と児童との対話活動」の時間を確保することは必要最低限の取組である。しかし、一単位時間は４５分と限られており、全ての学習活動とのバランスを考えながら「交流活動の時間を確保」することは指導の工夫としても大事な視点である。

具体的には、授業の後半部分、「まとめ」に移る直前の１５分程度の時間を確保することで、児童同士の「学び合い」「練り合い」の活性化につなげていく。なお、「UD 視点」との関わりは下記となっている。

UD(ユニバーサルデザイン)視点⑤
・展開では、主体的な学びを保証するための学習活動の時間配分を工夫している。

②、「考えをもたせる(書かせる)場面での視点６」での授業改善とその発展。

交流活動を活性化するためには、交流活動の主役である児童自身が「自分の考えをもつこと」が必要となる。そして、学習内容によっては、最初から「自分の考えをもつこと」が出来ない児童もいて、教師の何らかの支援・工夫が必要な場面も多く見受けられる。

このような状況を解消すべく、教師は色々な支援策を配慮したり事前に準備したりしなくてはならない。これらをまとめたものが「考えをもたせる(書かせる)場面での視点６」となる。これらはあくまでも代表的な６種類の支援策であり、教科や場面の違いに応じて、色々な支援策・変更策を考えながら進めている。まずは、令和元年度の６視点である。

１、ヒントカードの活用（話形・書き方のモデルを示す。）
２、選択式解答（モデルの中から一つを選ばせ、理由を考えさせる。）
３、考える時間の確保
４、友達の意見を参考にする。(意見を板書するなどして見える化、ペア学習、等)
５、ペアでの意見交流の場を設定し、自分の考えがもてるようにする。
６、考えの理由や根拠をもたせる。　　**※令和元年度の「視点」**

そして、研究が２年目を迎えると１年目の成果が現われてきた。それは、児童自身が、「まずは自分の意見を整理・記述する」という意欲・態度を身に付けてきたことである。教師の指示に従って「まずは自分の意見(考え)を整理する」意識が確実に向上してきた。

また、研究が令和２年度から「国語の学習」に焦点化された研究に変わったため、「考えをもたせる場面の視点」もそれに対応する必要性が出てきた。具体的には「言葉に着目する」重要性の高まりとともに、そのための視点(手立て)が必要になってきたことである。

具体的には、「前時までの学習内容の掲示」がヒントになる可能性が高いことや、「前時までのプリント類・資料が整理してあるファイルの活用」が意見を持つために重要なことが分かってきた。そのため、令和２年度からの視点には、「視点６」に加えて、下記のような視点の追加が必要となってきている。

・「前時までのポイントを整理した掲示物」(ホワイトボード)を有効活用する。
・学習してきた「プリント類」(ファイル)の「振り返り」を活用する。　　など
※令和2年度から追加された「視点」

このように、児童が「自分の意見をもつ(書く)ため」には、学習の連続性も生かす工夫(視点)が有効であることも分かってきた。特に「国語の学習」では、単元を通して思考の連続性を生かすことが重要もあり、それらを大きなヒントとして活用することもできる。

また、１年目の研究では「視点」の数を「６」と設定してきたが、今年度よりその数は外し、柔軟な対応として整理していくことにした。

なお、授業場面における具体策は、指導案の中に記述してあるので、参考にして欲しい。

③、「伝え合う場面での視点６」での授業改善とその発展。

交流活動の活性化に向けて、各児童がそれぞれにもっている自分の考えを生き生きと交流させていくために、教師はどのような支援を進めたら良いのか。児童の視線を踏まえて、その心情面・技術面も考慮しながら、下記の「視点６」に整理した。

１、「話型」を掲示して活用する。
２、「話し方名人」「聞き方名人」を活用する。
３、「声のものさし」を活用する。
４、必要な場面では、メモを取らせる。
５、「気持ちメーター」「付箋紙」を活用する。
６、「ハンドサイン」を活用する。　　**※令和元年度の「視点」**

また、研究の２年目となる本年度においては、児童の「対話能力・意欲」の高まりとともに、「国語の学習」に研究の方向性を変えたことにより、「伝え合う場面」においても、新しい視点が必要となってきた。具体的には「言葉・叙述に着目」しながら、意見交流や思考を深めるためには、「教材文の見える化」や「黒板での焦点化」等の更なる工夫が求められてきている。下記にその具体例を紹介する。

・「本時での扱う教材文(中心部分)の掲示」(ホワイトボード)を有効活用する。
・話合いの推移を「板書で比較・確認できるように整理」して活用する。　　など
※令和2年度から追加された「視点」

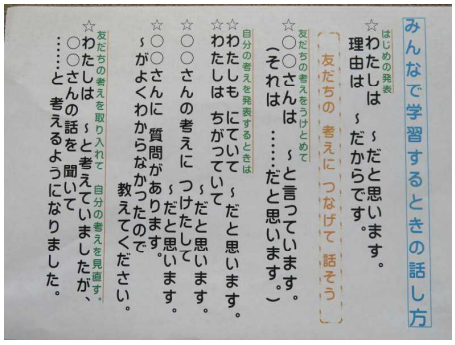
なお、これらの具体策についても、指導案の中に記述してある。また、その数についても限定をせずに扱うこととした。

以下では、上記(令和元年度版)の中にある「視点１・６」について説明する。

④、「話型」の活用

話合い活動において、「何をどう話したら良いのか分からない。」「質問の仕方が分からない。」など、話合いの仕方の基礎指導が必要となる場面が少なくない。

特に、２年生ぐらいからグループ学習や全体での話合いが活性化する状況となり、全体的な「話し方指導」が必要となってきている。また、高学年でも発表が苦手な児童もいるなど、全校での共通確認が必要となってくる。



このような状況の下、「話型」を各教室に掲示して「話合い活動」がスムーズに進むよう活用している　。　　**各教室に掲示中の「話型」**

⑤、「ハンドサイン」の活用

話合い活動が活性化されてきたり、色々な意見交流ができたりするようになると、話合い活動を効率的に進める必要性が高まってくる。そのような状況の時には「ハンドサイン」を用いることで、全体の確認がスムーズにできたり、話合いの方向性を直ぐに判断できたりすることに結び付けることができる。

また、教師が「ハンドサイン」を活用することに慣れてくると、授業の迅速化・効率化を図ることができる。

4種類を有効活用

(3)、「認め合い活動」における実践

児童間の「交流活動」を活性化するためには、「表現技能・方法」を教えるとともに、児童の「表現意欲」を高める必要もある。また、その土台には「この学級では誰が発表しても良い」とする温かな雰囲気を醸成しておく必要もある。そこで、本校では「学級内の一人一人の発言を認め合える雰囲気づくり」を重要視して、下記のような活動に取り組んでいる。全学級で同じ視点で認め合い活動を進めているため、担任以外の先生の授業においても、同じ視点で安心して学習活動に取り組むことができる。

①、「認め合う場面での視点６」での授業改善

前述の「伝え合い活動」と同じように、認め合うための視点を６つに設定して、全校で共通実践を進めてきた。全ての教師が同じ視点で児童の発表を公平に扱うため、児童の発表意欲は年々高まってきている。教師自身にとっても大事な視点である。

１、学級の雰囲気づくり（認め合う雰囲気を積極的に認める、褒める。）
２、相手の考えを否定しない。間違っても良いという雰囲気をつくる。
３、発表が終わったら拍手をする。
４、相手の意見を、うなづいたり、グッドサインを出したりしながら聞く。
５、話し手の良いところを必ず一つは見つけて伝える。
　※発表内容や発表の方法(声の大きさ・速さ等)など。
６、なるべく全員（一人一回）が発表する。　　**※令和元･2年度の「視点」**

また、この取組も２年目を迎えているため、「６」については「全員参加・発表型」へと進化してきている。どのような活動においても「全員が発表する」状況となってきている。なお、この視点の扱いにおいて、令和２年度の変更点(追加)はない。継続活用である。

そして、この取組と「UD 視点」との関連は下記の内容となっている。

UD(ユニバーサルデザイン)視点⑨
・児童の頑張りを認め、肯定的な表現で話しかけている。

②、「話し方名人」「聞き方名人」の活用

上記の「視点６」は、教師自身が指導上の留意点的におさえておくべき内容であるが、それらを児童にも目に見える形で掲示しておく必要性も感じられた。

そこで、分かりやすく取り組みやすい「話し方名人」「聞き方名人」として、各５項目に絞り込んで掲示し、常時活用することで、児童への働きかけを強めた。

見やすく分かりやすい内容でまとめてあり、児童の理解も良好であった。これも「認め合い活動」を高める上では大きな成果を上げている。

分かりやすい名人技

(4)、「深い学び」に向けた「振り返り活動」の充実

学びが深まる場面を考えた時、学習活動自体で深まる学びもあれば、学習を「振り返る場面」で、学びの気付き等を更に深めることもできる。ここでは、学習の終末場面での効果的な「振り返り」を工夫する考え方・実践等を紹介する。

①、「振り返り」の視点(見方・考え方)の例示・掲示

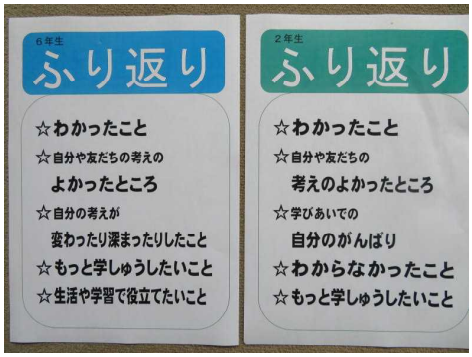
今まで、多くの授業では「まとめ」を最終の学習活動としていた。本時の学習から学び

取ったことを、話合い等で集約して再確認することで終了していた。

しかし、ここ数年、全国的に「まとめ」活動の後に「振り返り」活動を連動させることが一般的となってきた。

その理由は「学習の意義・発展性について児童自身に考えさせることで、本時の学習活動の意義・意識を更に高めることができる。」ということである。

しかし、何をどう振り返させることが良いのか、教師自身も不明な点が強かった。そこで、その視点を掲示・例示することで、児童とともに教師自身も有効な「振り返り」活動に結び付けることができた　。

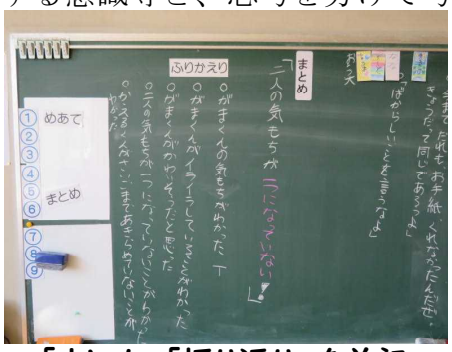


「振り返り」の視点を掲示

②、本時の「まとめ」との関連性

「振り返り」活動に取り組み始めた頃、学習の「まとめ」と「振り返り」の違いが不明なところもあり、校内での認識にずれが生じていた時期があった。教育事務所が出す「HOT NEWS」の記事を共有したり、「はばプラⅡ」に整理されている「めあてと振り返りの関連性」で研修を深めたりしていくと、授業の中の児童の発言についても、「まとめ」は学んだ内容、「振り返り」は学習の意義や今後の活用に関する意識等と、思考を分けて考えられるようになってきた。また、教師自身が児童の発言からその有効性等を教えられる内容でもあった。

特に、今年度の国語の学習では「この説明文にある書き方の工夫(筆者の工夫)を、作文する時にも活用したい。」など、発展性のある視点での発言も増えてきていて、教師自身も驚かされる気付きや考えが発表されるようになってきた。また、それらを児童間で共有することで、学習の意義・意識は更に深まってきている。



「まとめ」「振り返り」を並記

２、令和２年度

本研修テーマを引き継いで３年目。本年度は、国語の学習に焦点化して研究を進めることになった。国語の学習において「学びを深めること」は、具体的にどのような視点から国語の授業改善を進めることなのか、その視点の研究から始めていった。

前述でも触れたが、本年度の最初の２ヶ月は「臨時休校期間」であり、「実践研究」を進めることはできなかった。そこで、時間の余裕等を生かして「要請訪問」（５／２０）を実施し、「今求められる国語の授業改善の視点」を全校職員で学んだ。その校内研修の中で、キーワードとなる言葉を幾つか教えていただいた。

それらの話も参考にしながら、本校の研修の中心を「２つの視点」に絞り込んだ。

①「言葉による見方・考え方」を高めることで、「深い学び」につなげること。
②「言語活動の工夫・改善」を通して、学習のねらいの達成を図ること。

また、研究の視点を絞り込むため、その対象となる教材を「文学的文章」「説明的文章」の読み物教材に絞り込むことで、発表当日の公開授業（２授業）にも対応できるようにした。

なお、実際の授業実践に向けては、下記の二つのキーワードを合言葉にして、授業改善を進めたり、読み物教材を「読み深めること」につなげたりしていくこととした。

・「言葉による見方・考え方」を高める視点で授業改善を進める。
・「必要感のある言語活動」を通した授業改善を進める。

そして、これらに関する教師の教材観に関しては、指導案の「５校内研修との関わり」「（２）作品を読み深めることに向けた工夫」の項目の中で記述・説明している。

以下に、「文学的文章」「説明的文章」の順で、「指導事項の重点化」と「言語活動例」に関するポイント等を説明していく。

（1）、読み物教材における「指導事項の重点化・系統性」の整理

「言葉による見方・考え方」を理解する上で大きく関連してくる「指導事項」は、「新学習指導要領（国語）」にはどのように記述されているのか。その再確認のため、学習指導要領の内容を整理するとともに、それに関連した系統性もおさえた。

特に　下記の表に整理した指導事項と、それに関連する「言葉による見方・考え方」との結び付きは強い。また、学習の中で「着目する言葉」と「指導事項」との関連も強い。

①、文学的文章における「指導事項の重点化と系統性」

学習指導要領を基にして、左側に「重点化した指導事項」を整理した。右側にはその指導事項を２種類に分け、その特性に応じた系統性を明らかにした。このように具体的に区別することで、教師の教材観の整理等を深めている。

	重点化した「指導事項」	**「指導事項」の育成に向けた2視点・系統性**	
		1、主人公(登場人物)に関する理解・読解	**2、関連描写(場面・情景・出来事等)**　〃
低学年	・場面の様子を捉える。 ・登場人物の行動を捉える。 ・内容の大体を捉える。 ・人物の気持ちの変化を〃。	・**登場人物**が分かる。 ・**主人公**が分かる。 ・人物の**行動と気持ち**〃。	・**場面の様子**がが分かる。 ・**事件や出来事**が分かる。 ・物語の構造（推移）が分かる。
中学年	・人物の性格を捉える。 ・情景の変化等を捉える。 ・場面の移り変わりを〃。	・主人公の**気持ちの変化**〃。 ・人物の**性格**が分かる。 ・人物の**関係図**が書ける。	・**情景(場面)の変化**が分かる。 ・物語の**山場**が分かる。 ・**対比的な書き方**が分かる。
高学年	・登場人物の心情を捉える。 ・作品の「主題」を捉える。 ・「作者の思い」を捉える。	・主人公と**「主題」との関係性**が分かる。 ・主人公と**「題名」との関係性**が分かる。 作者が**「作品に込めた思い」**が分かる。	・表現技法と**効果**が分かる。 ・物語の**ストーリー性**が〃。

上記の関連をきちんとおさえながら指導を重ねることで、確実な習得につなげていく。

※２つの視点に分けた理由

学習事項の特徴を生かして２つの視点に区別して整理した。視点を狭めて考えることでその系統性がより具体的に分かってくる。例えば「主人公：登場人物」の理解は、このような広がりをもって理解が進むことが構造的に理解できる。そして、その認識は系統的・重点的な指導に生かすことができる。「関連描写」の項目も同様である。

②、文学的文章における「指導事項」と「言語活動」との関連性

上記の「指導事項」等をどのような言語活動を通して育成するのか。その具体例を示した内容が下記の表である。実際の授業場面が想定できるようにまとめた。

	育てたい「指導事項」	左記に関連した「言語活動例」等
低学年	・登場人物が分かる。 ・主人公(中心人物)が分かる。 ・場面や出来事の変化が〃。 ・人物の気持ち(変化)が〃。	・「登場人物」は何人。 ・「主人公」は誰。その理由は？ ・場面は幾つで書かれているか。 ・一番大事な場面はどれか? ・気持ちの変化は何から何へ？ ・心情曲線で表そう。 ・一番大きな事件(出来事)は何か。その理由は？
中学年	・情景の変化や意味が分かる。 ・人物の性格が分かる。 ・物語の山場が分かる。 ・表現技法と効果が分かる。	・情景の変化はどのように書かれているか。理由は？ ・主人公はどんな性格か。 ・人物の関係図を書こう。 ・物語のクライマックスはどこか。その理由は？。 ・「Ａ：Ｂ」の対比表現の効果・理由は何か？
高学年	・物語の「主題」が分かる。 ・「題名」の意味が分かる。 ・「作者の思い」が分かる。	・物語の主題(テーマ)は何か。その理由は？ ・物語の題名「・・・」の意味は何か。その理由は？ ・作者が「この作品に込めた思い」をまとめよう。

これらの具体例は、実際の授業場面で使うことができる。また、これらを基本として発展・応用形を考えて実践に生かすこともできる。

③、説明的文章における「指導事項の重点化と系統性」

文学的文章での整理(上記)と同様に、説明的文章における重点化等も整理した。

	重点化した「指導事項」	**「指導事項」の育成に向けた2視点・系統性**	
		1、言葉の使い方(文づくり等)	**2、説明の仕方(論の展開等)**
低学年	・時間的な順序を考える。 ・事柄の順序を考える。 ・内容の大体を捉える。	・**中心語(キーワード)**が分かる。 ・**中心文(キーセンテンス)**が〃。 ・伝えたい中心部分が分かる。	・**「問い」→「答え」の関係**が分かる。 ・**「はじめ」「なか」「おわり」の区分**が分かる。 ・「はじめ」「なか」「おわり」**の関係性**が分かる。
中学年	・段落相互の関係を考える。 ・理由や事例との関係 〃 。 ・要約する(中心の語・文)。	・**「要約文」の作り方**が分かる。 ・「要約文」を**書くこと**ができる。	・**「段落」**の**意味**が分かる。 ・「段落」の**役割**が分かる。 ・**「文章構成図」**が書ける。
高学年	・事実と意見等の関係を捉える。 ・文章全体の関係を捉える。 ・文章の要旨を把握する。	・**「要旨」の意味**が分かる。 ・「要旨」を**まとめること**ができる。	・**題名と「各まとまり」の関係**が分かる。 ・**論説文**の意味や構成が〃。

説明的文章では、「筆者の意図」に応じた「筆者の工夫(論の展開・事実と説明の関係等)」が異なっている。それらの教材分析をしっかりと進めること、で効果的な指導につなげる。

④、説明文指導における「資質能力」と「言語活動」との関連性

下記についても、文学的文章と同じ視点で整理した。

	育てたい「指導事項」	左記に関連した「言語活動例」等
低学	・基本的な構成が分かる。 ・文章のまとまりが分かる。 ・話の展開と理由が分かる。	・「問い→答え」の関係を見つけよう。 ・「はじめ」「中」「おわり」のまとまりは、どの部分(段落)か。 ・どういう順番で書いてあるか。その「理由」は何か。

年	・文章全体で伝えたいことが分かる。 ・自分の考えを短文で書ける。	・(筆者が)伝えたいことを短くまとめよう。 ・「・・・」について、自分の考えを〇字でまとめよう。
中学年	・各段落の役割が分かる。 ・段落相互の関係が分かる。 ・筆者の工夫が分かる。 ・要約することができる。	・幾つかの「段落」を正しい順番に「並び替え」よう。 ・「段落」の役割と、その順番(理由)を考えよう。 ・筆者の工夫には、何があるかを見つけよう。 ・キーワードをつなげて、要約文をまとめよう。
高学年	・文章全体の関係が分かる。 ・筆者の意図が分かる。 ・要旨をまとめることができる。	・文章全体を「文章構成図」で表してみよう。 ・筆者の主張と事例(事実)には、どんな意図があるか。 ・大事な点に注意して、要旨をまとめよう。

説明的文章も文学的文章と同様に、指導事項は、重層的な構造を持って習得されていく。それらの確認も踏まえながら確実な習得につなげていく必要がある。

(2)、「言葉による見方・考え方」の意味・必要性など

「言葉による見方・考え方」について、新学習指導要領では下記のように解説している。

> 言葉による見方・考え方を働かせるとは、児童が学習の中で、対象と言葉、言葉と言葉の関係を、言葉の意味、働き、使い方等に着目して捉えたり問い直したりして、言葉への自覚を高めることであると考えられる。

上記は難しい内容で記述されている。そこで、C小学校では「言葉による見方考え方を働かせる」ことを、下記のような意味として簡略化して捉えている。

> ・言葉に着目すること　　・言葉を吟味すること　　・言葉を選ぶこと　　など。

つまり、読み物教材に関して言えば、今まで以上に「語・文・文章・叙述等」に着目し、「叙述に従って丁寧に読み進めること」を大事にして学習を進めることが重要になる。

今から３０年ほど前、国語の読解学習の研究が盛んに進められていた時、「言葉に着目する」視点が注目を浴びていた。「言葉に着目して考える」ことで、討論の視点がより具体的に焦点化され、話合いを深めることができた。同様の考え方である。

以下の説明では、「言葉の見方・考え方を働かせること」を、「言葉に着目する」「着目する言葉」等の記述で括って説明していく。また、着目していく視点・内容等については、「読み取りの観点」という言葉を用いて具体的に絞り込んで説明していく。

(3)、「文学的文章」指導における「言葉による見方・考え方」

①、「文学的文章」における「言葉による見方・考え方」の把握・扱い

文学的文章における「読み取りの観点」は、前述した「指導事項」の内容でも確認できる。主な観点には「場面の様子」「人物の気持ち」などがある。そして、学習活動やその観点に応じて「着目する言葉」は変化してくる。

つまり、「言葉による見方・考え方を働かせた学習」とは、学習活動やねらいに応じて

「ある言葉に着目して、その中心や変化などを具体的に理解すること」である。また、交流活動での話し合いは、「文章の叙述に即した根拠や理由」を基にした意見交流(対話)で進めたり深めたりしていくことが重要となる。

また、「読み取りの観点」と「着目する言葉」には下記のような関連がある。

「読み取りの観点」	⇒	「着目する言葉」(叙述)	
・人物Aの気持ち	⇒	・Aの会話文	・Aの行動
・　〃　の変化	⇒	・Aの会話の変化	・Aの行動の変化 ※比較
・場面の様子	⇒	・情景描写	
・主　題	⇒	・中心人物の変化	・大きな事件と変化

そして、文学的文章での「主なねらい」は、「作品に込められた作者の思い」を読み取ることでもある。一つ一つの作品の特色に応じ、その観点を決めて作者の思いを読み取る。

また、各観点について深く読み取るためには「どの言葉とどの言葉に着目させて、読みを深めていくか」を予め決めておくことが重要である。

教材研究の視点からを考えると、下記のような作業は必要不可欠な準備と言える。

①、まずは、「着目する言葉」を教師自身がきちんと把握・整理しておくこと。
②、それらをどういう順で考えさせたり関連付けたりしていくのかを決めておくこと。

これらは、今までも大事な教材研究の視点であったが、今回の改訂で再度大事な視点となってきている。C小では「指導案」の中に明記することで共通理解を図っている。

②、「文学的文章」の学習における「言葉による見方・考え方」の実践例

令和２年度の研究では、指導案の中に教師の「言葉による見方・考え方」に対する具体的な内容を、指導案の中にも記述しておく必要性が出てきた。指導者が、どの言葉に着目して、どのような「言葉による見方・考え方」を育てようとしているのかを明記しておく(伝える)必要性があったからである。

そこで、今までに実施してきた研究授業における内容を下記に紹介する。

◇ ○○先生による「やまなし」の学習(9／7)における「言葉による見方・考え方」◇

・「やまなし」は、「賢治の心の中を写した作品」というフィルターを通して、独特の表現や作品(言葉)に隠されている意味や心情等を、深く読み解いていく。
・特に、兄弟かにの会話、情景描写が表す比喩表現等に着目しながら、作者は何を伝えようとしているのか、叙述から丁寧に読み取っていく。

◇ ○○先生による「お手紙」の学習(9／16)における「言葉による見方・考え方」◇

・二人の行動や会話を比較することで、登場人物の心情の理解を深める。
・二人の心情の変化や、「絆」を表す言葉に着目して、お手紙の価値を読み取っていく。

上記は、単元全体を通した「言葉による見方・考え方」であるが、一単位時間についても、上記と連動して進めている。詳細は、指導案の中の「本時の展開」等を参照されたい。

(4)、「説明的文章」指導における「言葉による見方・考え方」

①、「説明的文章」における「言葉による見方・考え方」の把握・扱い

文学的文章が「作者の思い」を読み深める作品だとすると、説明的文章は「筆者の意図・工夫」を読み深める作品ということができる。よって、「読み取りの観点」が違えば、その読み取り方も異なっている。

前述の「③、指導事項の重点化」でも触れたが、説明的文章での指導事項を大きく二つに分けた場合、「語や文にかかる内容」と「説明や論の展開にかかる内容」に分けられると考えた。つまり、「言葉そのものの扱いに重点をおく指導」と「説明の仕方・文章構成などに重点をおく指導」である。これらの関係も踏まえて「読み取りの観点」と「着目する言葉」との関連を下記のように考えた。

種　類	「読み取りの観点」　⇒　「着目する言葉」・視点
言葉の使い方等	・中心語句、ｷｰﾜｰﾄﾞ　⇒　・繰り返される言葉　・大事な言葉 ・要約文　⇒　・重要語句の選び方　・語句のつなげ方 ・要旨　⇒　・重要な段落や文　・全体の中心
説明の仕方等	・事柄の順序　⇒　「はじめ」「次」「おわり」等 ・段落の構成　⇒　「まず」「最後に」 ※「はじめ・中・おわり」 ・説明の順序　⇒　「問い」の文・「答え」の文

文学的文章と同様に、作品の特色等に応じて学習のねらいは変わってくる。そして、学習のねらいが違えば、「着目する言葉」や「扱い方」も変わってくる。文学的文章と同様に、読み取りを深めるためには「言葉による見方・考え方」の扱い方をしっかりと決めておき、指導に生かしていく必要がある。その視点・内容は「指導案」に明記されている。

②、「説明的文章」の学習における「言葉による見方・考え方」の実践例

文学的文章の内容と同様に、説明的文章の指導案の中にも、指導者の「言葉による見方・考え方」を明記している。下記に紹介する。

◇ ○○先生による「世界にほこる和紙」の学習（8／31）での「言葉による見方・考え方」◇

・小段落の内容をまとめる「短文づくり」では、小段落内の「重要語・中心語句」に注目して言葉を選び、短文づくりに生かしていく。

・「中段落のまとまり」と「小段落のまとまり」を比較することで、文章の構成と互いの関連性の理解を深める。

説明的文章と文学的文章では、「言葉による見方・考え方」の内容やその扱いが全く異なることが、ここからも分かる。それらを区別し、教材の特色に応じたり生かしたりしながら国語の学習を進めることが、今後もより重要になってくる。また、それらは「必要感のある言語活動」と結び付いてくる。

(5)、「必要感のある言語活動」の意味・設定に向けた配慮事項

①、「必要感のある言語活動」の意味・意義

上記(1)の表の中で、文種別に「一般的な言語活動」は紹介してある。また、新学習指導要領の中(国語編 P38)にも「読むことの言語活動例」が９種類紹介されている。しかし「必要感のある言語活動」の意味は、それらとは多少異なっていると考える。

昨年８月に群馬県教育委員会が発行した「はばたく群馬の指導プランⅡ」の国語の見開きの最初のページに「用語解説」がある。そして、５項目ある中の一番上には「言語活動」が説明されていて、下記のように書かれている。

> 単元を通して、資質・能力を身に付けさせるために設定する学習活動のこと。
> 児童・生徒の「知りたい」「やってみたい」という思いを高め、明確な相手意識や目的意識をもって取り組める、必要感のある活動であることが重要である。

また、この内容は、５月２０日の要請訪問時にも、指導主事から説明された内容である。

講話を聞いたり、「はばプラⅡ」を読んだりする中で、この視点を研究の中心に据えて「学習活動」を構想していく価値は理解できてきた。これらを分かり易く設定・提示することは、児童にとっても教師にとっても、共有しやすい学習課題として活用できる。

今年度の研究の後半から、この視点を生かした授業実践が展開されている。

②、「必要感のある言語活動」の設定に向けた配慮事項(基本的な共通事項)

今まで取り組んでいた言語活動を、いかにして児童の「より高い興味関心を持った活動」や「目的意識を明らかにした活動」に転換させていくか。「必要感のある言語活動」を設定する上では大事な視点である。そこで、学習のねらいでもある「育成したい言語能力」との関係性も考慮しながら、設定する上での配慮事項(基本)を下記のように考えた。

> **◇児童の視点から見直す◇**
> ・児童が積極的に取り組める(楽しさ・面白さ・主体性等がある)活動となっているか。
> ・学んだことがその後の日常生活でも生かせる活動となっているか。
> ・学習の見通しやゴールが分かり易い活動となっているか。※単元での一貫性。
> **◇教師の視点から見直す◇**
> ・児童の実態(段階・学力・困難性)に応じた活動となっているか。
> ・学習の連続性(応用・発展等)が生かされた活動となっているか。
> ・活動の目的・内容が、学習のねらいとズレていないか。
> **◇「はばプラⅡ」の視点から見直す◇**
> ・相手意識が明確になっているか。　※誰に向けて発信するのか？
> ・目的意識が明確になっているか。　※何のために学ぶのか？

これらは、「読み物教材」全体にわたる共通の視点として設定している。「文学的文章」「説明的文章」の各教材の特徴を踏まえた配慮事項については、以下で整理・説明する。

(6)、「文学的文章」指導における「必要感のある言語活動」

①、「必要感のある言語活動」に向けた配慮事項（文学的文章）

「文学的文章」の読み取りの主なねらいは、「作品に込めた作者の思いを読み取ること」にある。そして、それらは題名にストレートに表現されている場合も多い。

そこで、単元全体の学習課題（言語活動等）を設定する場合、その内容を下記のような視点も配慮しながら設定して行くことを確認した。

◇「文学的文章」の言語活動を設定する際の配慮事項◇　　○関連教材

・題名を利用して、深く読み取る意欲を高める活動とする。(例)題名の意味を考えよう。
・作者自身に視点を当てて興味を高める活動とする。(例)○○氏の作風をさぐろう。
○読書活動との関連を有効活用する活動とする。　(例)同じ作者の作品を読もう。
○表現(書く・話す)活動との関連を有効活用する活動とする。(例)○○を紹介しよう。

なお、単元全体の言語活動はもちろんのこと、一単位時間の言語活動も同じ視点で考えることで「一貫性を保つ」とともに、児童の学習意欲の向上等につなげる必要がある。

②、「必要感のある言語活動」の実践例(文学的文章)

学習のねらいを効果的に達成させるためには、どのような「言語活動」を展開すれば良いのか。それは「学習の効果」が高ければ、何をどのように教えても良いという考え方が根底には必要となってくる。この教材は「この指導方法がベストだ」というものではない。

児童が必要感を感じながら、生き生きと学習活動に取り組み、そのことで「学習のねらい」が達成され、児童の言語能力等が確実に高まっていれば、それはベストに近い指導だと言える。そのような幅広い視点で考えたり柔軟性をもたせたりする必要性もある。

そのような視点も考慮しながら取り組んだ「実践例」を下記に紹介する。

◇ ○○先生による「やまなし」の学習(9／7)における「必要感のある言語活動」◇

・宮沢賢治の「作品に込めた思い」「作品に隠した思い」を読み取っていこう、という構想の下に、単元全体・一単位時間の「言語活動」を考えた。

○ 単元全体
・『やまなし』に隠された賢治のひみつを探ろう。
○ 本時(第１０時)
・「１２月」の世界にかくされたひみつを探ろう。

◇ ○○先生による「お手紙」の学習(9／16)における「必要感のある言語活動」◇

・整理してきた「二人の心情の変化」から、音読の工夫を考えて、げきに生かす、という構想の下に、単元全体・一単位時間の「言語活動」を考えた。

○ 単元全体

・場面（５つの場面）に応じた「めあて」を設定して、各場面の読み取りを深める。
・読み深めた「５つの場面」のまとめを比較することで、二人の心情の変化の理解を深める。
・読み取った二人の心情の変化を、効果的な「音読げき」につなげる。
○ 本時（第６時：第５場面）
・二人の気持ちが、なぜ変わったのかを考え、まとめよう。

特に、「やまなし」の授業研究会では、「必要感のある言語活動」の考え方や構想の仕方について、群馬県教育員会の指導主事から貴重な指導をいただき、この研究が大きく前進した。それは上記（前半）で紹介した内容である。

（7）、「説明的文章」指導における「必要感のある言語活動」

①、「必要感のある言語活動」に向けた配慮事項（説明的文章）

「説明的文章」の読み取りの主なねらいは、「作品に書かれた、筆者が伝えたいことを読み取ること」であり、構成上の工夫に視点を当てた『論の展開や事例の使い方など、筆者の書き方の工夫（意図）を読み取ること』にもある。そのため、それらを生かした「単元全体の学習課題（言語活動等）の設定が重要になってくる。そして、その際に配慮していく具体的な視点は、下記のように考えている。

◇「説明的文章」の言語活動を設定する際の配慮事項◇　○関連教材
・題名を利用して、深く読み取る意欲を高める活動とする。（例）なぜ・・が大切なのか。
○読書活動との関連を有効活用する活動とする。　（例）同じ系列の作品を読もう。
○表現（書く・話す）活動との関連を有効活用する活動とする。（例）新聞を作ろう。

説明的文章の学習においても、単元全体での「一貫性を保つ」言語活動が重要である。

②、「必要感のある言語活動」の具体化（説明的文章）

文学的文章と同様に、説明的文章の実践例を下記に紹介する。

◇ ○○先生「世界にほこる和紙」の学習（8/31）における「必要感のある言語活動」◇
・「世界にほこる和紙」で読み取った「内容」「構成」を、自分で選んだテーマにおける「リーフレットづくり」に生かそうという構想の下に、単元全体・一単位時間の「言語活動」を考えた。具体的には、下記の視点で作文活動につなげている。
・「内容」の読解の視点＝伝えたい内容のために、どのような具体例が必要なのか。
・「構成」の読解の視点＝効果的に伝えるためには、構成の工夫に何が必要なのか。

○ 単元全体
・読み取っている内容や構成を「リーフレットづくり」に生かすことで、説明文の読み取りを深めていく。

・「短文づくり」や「要約文づくり」を通して、文章全体の構成の理解を深める。
○ 本時(第４時)
・「中」の部分で、筆者は何を伝えたかったのかを考える。

このように、何を目的として学習を進め、どこにつなげていくのか。また、そのためには「どのような言語活動」で進めて行くのか。それらを明確にするとともに、児童にもはっきりと伝え、「必要性」をより感じる言語活動を進めることは、主体性を高めることやその「学び」を深めることにもつながる。

３、まとめ

令和２年度の「研究のねらい」の達成に向けて、「言葉による見方・考え方」と「必要感のある言語事項」に視点を絞り込み研究を深めてきた。また、それと並行して「主体的・対話的で深い学び」の研究も３年目となっている。双方を組み合わせながらの研究は難しいが、やりがいもあった。学校全体の授業が変わってきている。特に、国語の学習指導は確実に変わり始めている。先生方が同じ方向に向かい、皆で協力して進めてくれている。

児童が授業に集中したり、真剣に教科書の「教材文」を読み込んでいったりする姿を研究授業で見る度に、先生方の努力が児童の学力向上に反映しているとも感じる。

研修テーマの児童像が実現できるよう、今後も継続して研究を進めていきたい。

なお、「研究の成果・課題」は、「報告書」の中で紹介する。

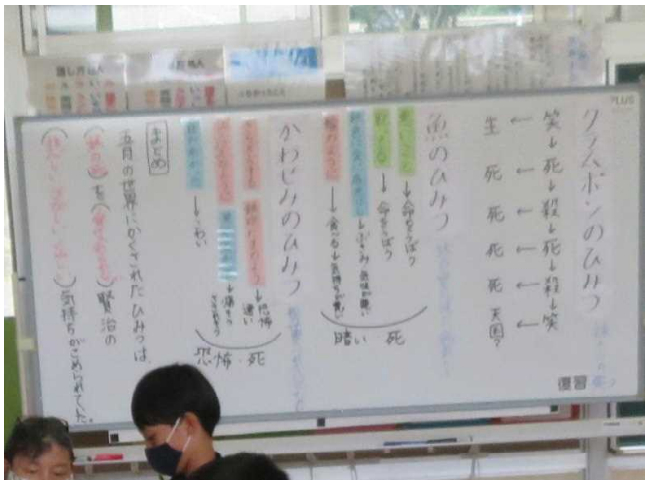
資料：実践記録集(指導案)

〇資料１ ： 7月13日(火)　3年生「こまを楽しむ」(説明文)

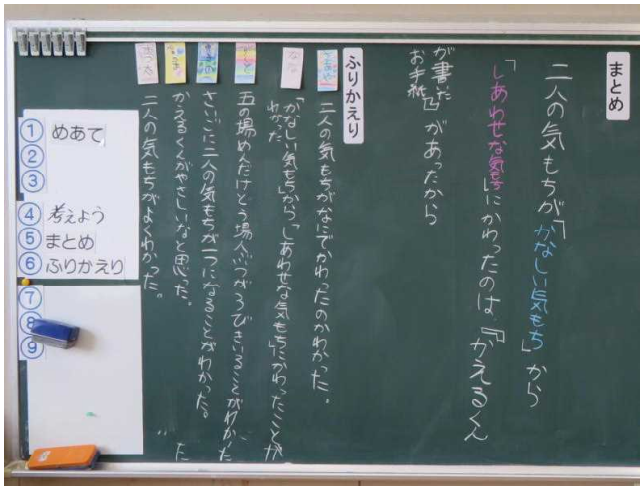
※研究の進展に伴い、この後「指導案」の形式に、一部の変更がありました。
（「研究の概要」を参照。）

〇資料２ ： 8月31日(火)　4年生「世界にほこる和紙」(説明文)

○資料３ ： ９月　７日(火)　６年生「やまなし」(物語文)



○資料４ ： ９月１６日(木)　２年生「お手紙」(物語文)



※　補足説明

本年度の研究の途中で、校内研修の「副主題」の見直しが進み、４人の先生の校内研修の副主題は、年度当初のままとなっています。

１０月１６日(金)の指導案（２名）につきましては、「研究の概要」と同じ「副主題」となっています。研究の内容につきましては全く同じです。表現を変えただけです。御承知おきください。

国語科学習指導案

令和２年７月１３日（金）第５校時
Ｃ小学校　第３学年　（３年教室）
指導者　○○　○○

授業の視点

ミニカードを用いて意見を可視化し交流する活動を行えば、文章全体の構成を捉えることができるであろう。

１　単元名　段落とその中心をとらえて読み、かんそうをつたえ合おう」
（れんしゅう）『言葉で遊ぼう』
『こまを楽しむ』

２　考察

（１）児童の実態（男子２名、女子３名）

本学級の児童は、男子２名、女子３名の学級である。好奇心にあふれ学習に対する意欲は比較的高い。しかし、できないことがあるとあきらめてしまったり、集中力がとぎれてしまうことも多い。また、読書も好きな児童が多く、朝読書の時間を楽しみにしている。

次に、国語科における実態は以下の通りである。

〈知識・技能〉

１，２年生の段階で時間的な順序や事柄の順序などを考えながら、内容の大体を捉えることは学習してきている。しかし、３年生になって初めての説明文単元のため、段落の役割を理解することや情報と情報の関係についての理解は不十分であると思われる。

〈思考・判断・表現〉

１，２年生段階で文章の中の重要な語や文などに着目しながら内容の大体を読むことは学習している。３、４年生では、中心となる語や文を見付けることを通して、考えとそれを支える理由や事例との関係などを把握することを学習するが、考えと事例と区別し、関係を把握することについては学習経験が浅い。

〈主体的に学習に取り組む態度〉

自分の体験と結び付けて感想や考えをもつことは大体の児童ができている。また、学習したことを次に生かそうとする姿勢が見られる。しかし、読んで理解したことに基づいて感想を述べたり、友達との感じ方の違いに気づけたりできる児童は比較的少ない。

（２）教材観

本単元で扱う説明的な文章は、学習指導要領に以下のように位置づけられている。

〔第３学年及び第４学年〕 １　目標　（２） 筋道立てて考える力や豊かに感じたり想像したりする力を養い、日常生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め、自分の思いや考えをまとめることができるようにする。 ２　内容 〔知識及び技能〕 （１）カ　主語と述語との関係、修飾と被修飾との関係、指示する語句と接続する語句の役割、段落の役割について理解すること。 〔思考力、判断力、表現力〕　「Ｃ読むこと」 （１）ア　段落相互の関係に着目しながら、考えとそれを支える理由や事例との関係などについ

て、叙述を基に捉えること。。
ウ　目的を意識して、中心となる語や文を見付けて要約すること。
オ　文章を読んで理解したことに基づいて、感想や考えをもつこと。
カ　文章を読んで感じたことや考えたことを共有し、一人一人の感じ方などに違いがあることに気付くこと。

本教材は、「言葉で遊ぼう」と「こまを楽しむ」を教材とし、感想を伝え合うという言語活動を設定している。順序を追って読む力は、２年生で繰り返し培ってきたので、本単元では、「初め」「中」「終わり」などの文章の「まとまり」や「段落」を意識して文章全体を見わたして内容を捉えるという経験をさせ、今後の説明的な文章の学習の基礎となる内容を押さえたい。

「こまを楽しむ」の文章構成は、「初め」で「問い」が示され、「中」でその事例が列挙され、「終わり」で事例のまとめや筆者の思いに関する内容が述べられている。

「言葉で遊ぼう」と比べ事例が増え、本教材では六つの事例が挙げられている。文章も長くなるが、構成そのものは難しくないため、早い段階で全体を見通して、文章をまとまりごと捉えられるようにしたい。また、「中」の事例が、大きく二つに分かれることも着目させたい。事例の順序性は３年下巻「すがたをかえる大豆」でも、扱う内容である。ここで事例の順序にも筆者の意図があるということを意識づけておきたい。

３　単元の目標

◎段落の役割について理解することができる。
◎全体と中心など情報と情報との関係について理解することができる。
◎段落相互の関係に着目しながら、考えとそれを支える理由や事例との関係などについて、叙述を基に捉えることがきる。

４　単元計画（全８時間計画、□は本時）

過程	時間	主な学習活動	評価の観点 知	思	態
つかむ	1	①言葉遊びやこまについて知っていることを発表する。 ②単元の目標を確認し、学習計画を立てる。 ③「言葉で遊ぼう」を通読し、「段落」について知る。 ④「初め」「中」「終わり」の文章構成を知る。 課題　説明文の構成を読み取り、感想を伝えあおう。	○		○
	2	⑤「問い」と「答え」に着目して、「言葉で遊ぼう」の各段落の内容を読む。 ⑥「言葉で遊ぼう」を読んだ感想を友達と伝え合う。		○	
追究する	3	⑦「こまを楽しむ」を通読し、二つの「問い」を捉え、「初め」「中」「終わり」の文章構成を確認する。	○		
	4 5	⑧「中」を「答え」に着目して読み、中心となる言葉や文を確かめ、整理する。		○	
	6	⑨「終わり」と「題名」、「終わり」と「中」の関係について考える。		○	○
	7	⑪六つのこまの中から、いちばん遊んでみたいこまを選び、理由と合わせてノートにまとめる。			
まとめ	8	⑫いちばん遊んでみたいこまについて交流し、友達の感想との共通点や相違点など、考えたことをまとめる。 叙述をもとに選んだ理由をはっきりと伝え合っている。	○		

る		自分と友達の理由や感想に違いがあることに気づいている ⑬「全体と中心」を読み、文章全体や段落の中心を捉えるよさを整理する。 ⑭単元の学習を振り返る		○	

5　研究主題に関連した指導の方針

主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善
～豊かな交流活動に向けた学習指導の工夫を通して～

【主体的な学びについて】
・説明文の構成や説明の工夫について､児童が自発的に気づけるような学習課題や発問を工夫する。
・自分の考えを伝えやすい教具を工夫する。

【対話的な学びについて】
・友達の発言していることをしっかりと聞き取るようにする。
・友達の意見の共通点や相違点などを見付けさせ、対話につながるようにする。

【深い学びについて】
・「書かれていること」を理解するとともに、説明文の構成や説明の工夫などの「書かれ方」にも着目し、説明的文章を書く活動へとつなげる。

6　本時の展開

（1）ねらい　「終わり」と「題名」､「終わり」と「中」との関係に着目して、文章全体の構成を整理して捉えることができる。

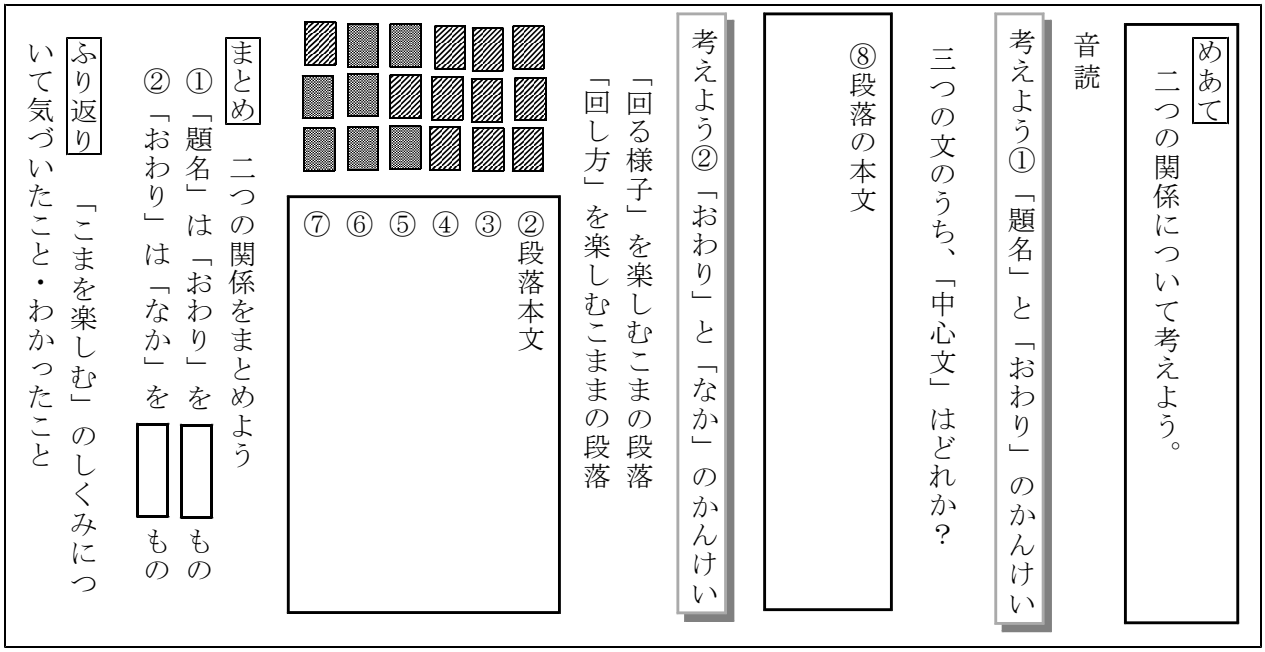
（2）準　備　【児童】教科書、ノート
【教師】本文拡大図、ミニカード

（3）展　開

学習活動「予想される児童の反応」	時間	指導上の留意点及び支援・評価
［学習課題］ 二つの関係について考えよう。		
1　本時の学習のめあてを確かめる。	5	・「おわり」とそれまでに書かれていることがどんな関係にあるのかを考えることを確認する。
2　「おわり」と「題名」の関係について考える。	10	◎「おわり」の三つの文の中で、一番大事だと思われる「中心文」はどれかを考える。
【考えを持たせる場面での手立て】 ②選択式（三つの文から一つを選ばせ、理由を考えさせる）		
		・「題名」との関係を考える。 ・「中心文」の中で、どの言葉が大切かを考える。

		【主】進んで文章の内容を考え選択しようとしている（観察・発言）
3　「おわり」の中心文と、「中」との関係について考える。 ・二つの大切な言葉をさがす。 ・六つのこまのうち、どれが「回る様子」を楽しむこまで、どれが「回し方」を楽しむこまなのか考える。 ・六つのこまを二つのグループに分類し、「中」の段落の順序との関係を考える。	20	・「回る様子」「回し方」に着目する。 ◎「中」に書かれている文の中の言葉を根拠に考える。 ・前半三つが「回る様子」を楽しむこま、後半三つが「回し方」を楽しむこまになっていることを押さえる。 ◎ミニボードを使って、自分の考えを書く。 【思】段落の中心となる言葉や文を捉えている（記述・発言）
【考えを持たせる場面での手立て】 ③考える時間の確保 ⑥考えの理由、根拠を持たせる。 〇教材文の提示 【伝え合う場面の手立て】 ⑤ミニカードの活用（同じ意見なのか、違う意見なのか可視化する） 【認め合いの場面での手立て】 ①学級の雰囲気づくり（認め合える雰囲気を積極的に認め、ほめる） ⑥なるべく全員（一人一回）発表する。		
4　まとめをノートに書く	5	・①「おわり」と「題名」との関係、②「おわり」と「中」との関係についてまとめる。
5　本時の学習をふりる。	5	・説明文の構成について、ふり返りの視点を与え、わかったこと、気が付いたことを発表する。
現れてほしい児童の姿 段落相互の関係に着目して文章全体の構成を整理して捉えることができる。		
		・次回は六つのこまの中から、自分がいちばん遊んでみたいものを選んで、理由をまとめることを伝える。

7　板書計画


めあて
二つの関係について考えよう。
音読
考えよう①「題名」と「おわり」のかんけい
三つの文のうち、「中心文」はどれか？
⑧段落の本文
考えよう②「おわり」と「なか」のかんけい
「回る様子」を楽しむこまの段落
「回し方」を楽しむこままの段落
②段落本文
③
④
⑤
⑥
⑦
まとめ　二つの関係をまとめよう
①「題名」は「おわり」を　　もの
②「おわり」は「なか」を　　もの
ふり返り　「こまを楽しむ」のしくみについて気づいたこと・わかったこと

４年生（国語）の実践

（１）概要

①　日時　　令和２年　８月３１日（月）第５校時
②　場所　　第４学年教室
③　指導者　〇〇　〇〇

（２）単元名

「中心となる語や文を見つけて要約し、調べたことを書こう。」
『世界にほこる和紙』

（３）本時のねらい

「中」で、どのような事例が何を説明するために述べられているのかを読み取ることができる。

（４）校内研修との関わり

「主体的・対話的で深い学び」に向けた工夫など

①　主体的な学びについて
・自分の選択した伝統工芸品に対するリーフレットづくりを行うことで、児童の主体的な活動に結びつける。

②　対話的な学びについて
・児童の意見を板書し、視覚化させることで、対話へとつなげていけるようにする。

③　深い学びについて
・リーフレットづくりと関連付けて活動を進めることで、段落の役割の理解や要約文づくりの活動を深めていく。

「作品を読み深めること」に向けた工夫など

①　「言葉の見方・考え方」について
・小段落の内容をまとめる「短文づくり」では、小段落内の「重要語・中心語句」に注目して言葉を選び、短文づくりに生かしていく。

②　「必要感のある言語活動」について
・読み取っている内容や構成を「リーフレットづくり」に生かすことで、説明文の読み取りを深めていく。

（５）準　備

教師：説明文カード、拡大写真
児童：教科書、ノート

（６）展　開

学習活動【予想される児童の反応】		指導上の留意点及び支援･評価
めあて　「中」の部分で筆者は何を伝えたかったのか考える。		
1　本時のめあてを確認する。	5	・説明文においての「中」の必要性を問う。リーフレットづくりをする際に、なぜ「中」が必要なのか、「中」にはどんなことを書けばよいのかを考えることを確認する。

2　教科書を読んで考える。 ・「中」の部分を読み、考える。それぞれの段落で何を説明するために挙げられている例なのか考える。写真との関連にも触れる。	25	・前半（３段落から６段落）を読み、それぞれの内容を１０文字以内でまとめる。 ・後半（７段落から９段落）を読み、それぞれの内容を１０文字以内でまとめる。 【考えを持たせる場面での手立て】 ①　考える時間の確保
3　なぜこの例が挙げられているのか考える。 	5	・「中」がないとすると、どうなるのか考える。筆者の考えに信憑性を持たせるため、相手に考えが伝わるようにするために「中」があることが大切なのだということに気づかせる。 【伝え合う場面での手立て】 ⑤出た意見を板書する。（同じ意見なのか、違う意見なのか視覚化する。）
4　まとめ 「中」を考えるときに大事なことをまとめる。 〈表れてほしい児童の姿〉 ・「中」の構成を理解し、筆者の工夫を見つけることができる。	5	・「中」は自分の考えを相手に伝えるために必要である。
5　本時の学習をふり返りをする。	5	

（７）成果と課題

①主体的な学びについて

○学級の雰囲気も良く、普段なかなか自分の意見を言えない児童も生き生きと発言していた。

●要約文の文字数を少なくすることで、時数にとらわれずに取り組むことができるのではないか。

②対話的な学びについて

○短文が掲示されていたことで、自分の意見と対比して考えさせるには有効であった。

●意見交流における教師と児童とのイメージの違いがあった。手立てを明確にしておくとよい。

③深い学びについて

○これまでの学習の積み重ねが生かされ、「中」の文について意欲的に考えることができていた。

●自分の考えをまとめるための手立てを示してあげることで、さらに意欲的に活動できたのではないか。

国語科学習指導案

令和２年　９月７日（月）第５校時
Ｃ小学校　第６学年（６年教室）
指導者　○○　○○

授業の視点

これまでの学習をもとに「賢治の心の中を探る」という視点で読み取りを深めれば、「十二月」の幻灯に込められた世界観に気づくとともに、作者の思いや気持ちを考えることができるであろう。

１　単元名　作品の世界をとらえ、自分の考えを書こう
『やまなし』

２　考察

（１）児童の実態（男子５名、女子１名）

本学級の児童は、男子５名、女子１名の学級である。学習に対する意欲、能力ともに差が大きく、学力の高い児童は、発言や意欲の面で課題があり、学習に対する意欲の低い児童には、短時間で集中して課題に取り組めるような課題の精選等の配慮が必要である。また、全体への指示のあとに、個別に声かけをしたり、一緒に課題に取り組んだりする必要がある児童もおり学級経営、各教科の授業において工夫が必要な学級である。

次に、国語科における実態は以下の通りである。

〈知識・技能〉

これまでの学習において、文章を読んだり書いたりする際に出てきた表現の工夫について６年生の段階では、表現の工夫への気付きをまとめて整理することが求められる。しかしながら、日常生活の中で、文章に触れる機会の少ない児童が多いため、まず表現の工夫に気付かせることが重要になってくると思われる。

〈思考・判断・表現〉

５年生までの段階で、描写に着目して登場人物の相互関係や心情について捉えることは学習している。６年生では、加えて人物像や全体像を具体的に想像したり、表現の効果を考えたりする学習を行う。しかし文章を読んで、具体的にその場面の様子を想像したり、表現の効果について考えたりすることは苦手としている児童が多いように思われる。

〈主体的に学習に取り組む態度〉

難しい文学的文章や、説明的文章を前にすると、苦手意識が働き、粘り強く学習に取り組もうとする意欲が低くなる児童が多い。今回の『やまなし』も宮沢賢治特有の世界観を前に、意味が分からず学習が進みにくいという心配がある。そこで、宮沢賢治という人物像について丁寧に学び、様々な視点から『やまなし』を読み進めていき、作者がどのような思いや願いをこめて『やまなし』を書いたのかを考えられるようにしていきたい。

（２）教材観

本単元で扱う体積は、学習指導要領に以下のように位置づけられている。

（第５学年及び第６学年）
１　目標　（２）
　筋道を立てて考える力や豊かに感じたり想像したりする力を養い、日常生活における人の関わりの中で伝え合う力を高め、自分の思いや考えを広げることができるようにする。
２　内容
（知識及び技能）
（１）　ク　比喩や反復などの表現の工夫に気付くこと。
（思考力、判断力、表現力）　「Ｃ読むこと」
（１）　エ　人物像や物語の全体像を具体的に想像したり、表現の効果を考えたりすること。
　　オ　文章を読んで理解したことに基づいて、自分の考えをまとめること。

本教材の『やまなし』は、一見すると小さな谷川の様子を写したファンタジー絵本の世界のようなイメージを受けるが、普通に読んだだけではその独特の世界観ばかりが目立ち、作品に込められた作者の願いや思いまで実感することは難しい作品である。情景描写や作者独自の表現に込められた世界観を考えたり、二つの幻灯が表す世界の対比を行ったりする活動など、様々な視点や角度から読み進めていくことで、５月の幻灯が表す世界観は「死」「弱肉強食」、１２月の幻灯が表す世界観は「生」「生命の喜び」であるといったイメージを読み取ることができる。

しかし、さらにもっと奥深くこの作品を読み深めていくこともできる。それは、作者の宮沢賢治の生涯（家族構成や生き方）を知り、『やまなし』以外の数々の作品に込めた思い（作風）を理解した上で読んでいくと、それまでの表向きに描かれている上述のイメージだけでなく、賢治がこの作品に込めた本当の世界観や、思いを読み取ることができる。とても一言では言い表すことのできない奥深い作品である。

小学校６年生という成長段階でここまで読み解く必要があるのかと疑問に思うこともあったが、【物語に隠された秘密を探る】という身近な課題を設定し、毎時間様々な視点からこの物語に隠された「ひみつ」を探りながら読み進めて行く活動を行うことで、作者の本作品に込めた思いや願いに気づくことができると考える。

３　単元の目標

◎文章を読んで理解したことに基づいて、自分の考えをまとめることができる。
◎比喩や反復などの表現の特徴に気づくことができる。
◎人物像や物語の全体像を具体的に想像したり、表現の特徴を考えたりすることができる。

４　単元計画（全１１時間計画、□は本時）

過程	時間	主な学習活動	評価の観点		
			知	思	態
つかむ	1	課題　『やまなし』に隠された賢治のひみつを探ろう。 『やまなし』の全文を読み、初発の感想、疑問に思ったこと、なぜ題名がや『やまなし』なのか自分の考えを書く。		○	○
追	2	【宮沢賢治ってどんな人？どんな生き方？】 資料『イーハトーブの夢』を読み、宮沢賢治の生き方、考え方や作品に込めた思いについて自分の考えをまとめる。	○	○	
	3	【ふしぎな言葉にかくされたひみつを探ろう。】 難語句、造語の意味を考える。		○	

究する	4	【ふしぎな表現方法を見つけ、意味を考えよう。】 表現の特徴をつかみ、その効果を考えて読む方法を知る。		○	
	5	【はじめとおわりの二文にかくされたひみつを探ろう。】 冒頭と終末の二文から賢治の思いを想像して読む。	○	○	
	6	【『やまなし』の世界を絵に表そう。】 『やまなし』に描かれている二つの世界の情景を読み取り、情景図にまとめる。	○	○	
	7	【たくさんの色にかくされたひみつを探ろう。】 文中の色が表している情景について考える。		○	
	8	【幻灯の謎を探ろう！なぜ５月と１２月の２つの世界なのか？】 二枚の幻灯を比較する。 賢治が一番伝えたかった対比は何なのか？	○	○	
	9	【「５月」の世界にかくされたひみつを探ろう。】 「５月」の幻灯が表す世界について表現に着目して読み、「５月」はどのような世界か、自分の考えをまとめる。	○	○	
	10	【「１２月」の世界にかくされたひみつを探ろう。】 「１２月」の幻灯が表す世界について表現に着目して読み、「１２月」はどのような世界か、自分の考えをまとめる。	○	○	
	11	【『やまなし』にかくされた賢治のひみつをまとめよう。】 これまでの学習をもとにして作者が題名を『やまなし』にした意図や思いを考え、自分の考えを文章にまとめる。	○	○	○
まとめる	12	友達と交流しあいながら、お互いの考え方を比べる。 学習の第１時での自分の考え方と比べ、読みが深まったことを実感する。 宮沢賢治は、妹の死を受け入れられない気持ちや自分の迷いを払うために書いた作品である。		○	○

4　研究主題に関連した指導の方針

主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善 ～豊かな交流活動に向けた学習指導の工夫を通して～

（１）「主体的・対話的で深い学び」に向けた工夫など

①、主体的な学びについて

・宮沢賢治独特の表現方法や、考え方について児童が進んで教材と向き合えるよう、資料『イーハトーヴの夢』音読集から『永訣の朝』を活用し、じっくりと宮沢賢治の人となり、妹との関係、考え方等に触れ、物語を読み進めていけるようにする。

・自分の考えを持ちやすい、伝えやすいワークシート等の教具の工夫を行う。

・意欲を失わずに活動に取り組めるように、見通しもった学習過程を示す。

・自分の考えを表現しやすいよう視覚的な情報を多く活用する。

②、対話的な学びについて

・友達の考えを聞き、自分の考えと比べる活動を取り入れ、考え方に広がりを持たせる。

・友達の考えと自分の考えとの共通点や相違点などを見つけさせ、対話につながるようにする。

③、深い学びについて

・読みが深まったことを実感させるために、初発の感想を書くときに、なぜ題名が「やまなし」なのか自分の考え（予想）を書かせておき、最終段階で先に書いたものと比べることで自分の考えの変容、読みの深まりを実感できるようにする。

・難語句、造語を考えるワークシートは学習途中で修正可能なものを用意し、物語を読み進めていく過程において自分の考えが変容している（深まっている）ことを実感できるようにする。

（２）「作品を読み深めること」に向けた工夫など

①、「言葉の見方・考え方」について

・「やまなし」は、「賢治の心の中を写した作品」というフィルターを通して、独特の表現や作品（言葉）に隠されている意味や心情等を深く読み解いていく。

・特に、兄弟かにの会話、情景描写が表す比喩表現等に着目しながら、作者は何を伝えようとしているのか、叙述から丁寧に読み取っていく。

②、「必要感のある言語活動」について

・児童が取り組みたくなるような「より具体的な視点（課題）」を、「単元を貫く課題」として設定する。具体的には「やまなしに隠された秘密を探る」ことを学習活動（単元）のテーマとして設定した。

・作品を読み深めるということは、作者の人生観や考え方を読み解くことにあるとする「読解の楽しさ」を、中学入学前の児童に味会わせたい。

６　本時の展開

（１）ねらい　これまでの学習や文中の表現をもとに、「十二月」の幻灯に込められた作者の思いや願い、世界観について自分なりの考えを持ち、文章にまとめることができる。

（２）準　備　【児童】教科書、ワークシート
【教師】ワークシート

（３）展　開

学習活動【予想される児童の反応】	時間	指導上の留意点及び支援・評価
１　前時のふりかえりと本時のめあてを知る。	5	・「五月」に世界に隠されていたひみつは、「妹の死をあきらめきれない賢治の心の葛藤、思いがこめられていたこと」を確認し、本時では「十二月」に隠されているひみつを考えていく。
［めあて］「十二月」の世界にかくされたひみつを探ろう。		
２　二つの視点で物語を読み深め、ひみつを探る。	30	・何がどう変わったかという視点で考えさせる。 【考えを持たせる場面での手立て】 ①話し方・書き方の話型を示す。 ③考える時間を確保する。 ⑥考えの理由や根拠を持たせる。

考えよう①　あわくらべ場面のひみつ 【兄：大きい安心、弟：小さい安心】 考えよう②　やまなしが登場する場面のひみつ 【カワセミだと思い不安な気持ち　→ 父の言葉を聞いて安心した気持ち】 【（妹の死を）受け入れられない　→ 受け入れられた】		・安心の度合いを競う兄弟の様子を会話文の中から考える。 ・やまなしが落ちてきたことでかにの兄弟にどんな変化があったか考える。 ・賢治の心はどう変化したか考える。
３　自分の考えを発表し合い、全体のまとめを行う。 【妹の死を受け入れ、前を向こうとした賢治の気持ちの変化を表している。】	５	・「十二月」はどのような世界を表しているのかまとめる。 【態】表現や構成等に着目して、作品世界を捉えることに粘り強く取り組もうとしている。（発言・記述） 【思】表現の特徴を考えたり、叙述を比べながら丁寧に読んだり考えたりしている。（発言・記述） 【伝え合う場面での手立て】 ①話し方名人・聞き方名人を示す。 【認め合いの場面での手立て】 ②相手の考えを否定せず最後まで聞き、間違ってもいいという雰囲気をつくる。
４　本時の学習をふり返る。 【やまなしが落ちてきたことでかにの兄弟の気持ちに変化があったことがわかった。】 【５月と１２月で賢治さんの気持ちの変化が表されていることがわかった。】	５	・ 本時の学習でどんなことがわかり、どう思ったか、ふり返りシートに記入し、発表させる。
現れてほしい児童の姿 「十二月」の世界にかくされたひみつは、「トシへの思いを晴らし、前を向いて生きていこう」とする賢治の気持ちの変化を表しているということだと思います。		
		・ 次回は題名『やまなし』に込められた賢治のひみつをまとめることを伝える。

【課題】『やまなし』にこめられた賢治のひみつを探ろう。

め『十二月』の世界にかくされたひみつを探ろう。

考えよう①

あわくらべの場面のひみつ

弟　あわを大きくみせたい。

↓

妹の死を受け入れられない。

支持

父

兄　弟より大きなあわを作れる。

↓

妹の死を受け入れられた。

考えよう②

やまなしが登場する場面のひみつ

（　黒く丸い大きなもの　）　↓

かわせみ

恐怖・不安

⇔

やまなし

遠眼鏡のような両方の目をあらんかぎりのばして、よくよく見てから言いました。

父

兄弟かに（安心）

賢治の心（悲しみやさびしさからの解放、前を向く、明るい未来など）へのきっかけ

⇔

・おどるようにして　・月光のにじがもかもか

・いいにおい　・金剛石の粉　・水はサラサラ

・私の幻灯は、これでおしまいであります。

まとめ　十二月の幻灯にかくされたひみつは、妹の死を受け入れ、前を向こうとする賢治の気持ちの変化を表している。

２年生（国語）の実践

（１）概要

①　日時　　令和２年　９月１６日（水）第２校時
②　場所　　第２学年教室
③　指導者　〇〇　〇〇

（２）単元名

『お手紙』

（３）本時のねらい

お手紙を待つ第一場面と第五場面の違いに着目して、二人の友情の深まりを読み深めることができる。

（４）校内研修との関わり

「主体的・対話的で深い学び」に向けた工夫など

①　主体的な学びについて
・どのような学習課題に対しても、まずは自分の考えをしっかりと持ち、意見交流に結びつける。

②　対話的な学びについて
・発表する時には、しっかりと聞く雰囲気を作る。
・友達の考えと、自分の考えとの共通点や相違点などを見つけさせ、対話へとつなげられるようにする。

③　深い学びについて
・読みが深まったことを実感させるために、学習の終わりに二人の気持ちを想像しながら音読する。
・振り返りをワークシートに書く活動を通して、登場人物の二人の気持ちの変容と、お手紙という二人をつなぐものの重要度に気づかせる。

「作品を読み深めること」に向けた工夫など

①　「言葉の見方・考え方」について
・言葉の種類など、二人の行動や会話を比較することで、登場人物の心情の理解を深める。
・二人の心情の変化やきずなを表す言葉に着目して、お手紙の価値を読み取って行く。

②　「必要感のある言語活動」について
・児童が取り組みやすくなるような「より具体的な視点(課題)」を「めあて」として設定する。
・読み深めた「五つの場面」の結果をつなげることで、かえるくん達の心情の変化を読み取る。

（５）準　備

教師：　ワークシート、挿絵、学習をまとめたもの、ホワイトボード
児童：　教科書、筆記用具

（６）展　開

学習活動【予想される児童の反応】	時間	指導上の留意点及び支援･評価
1　本時のめあてを確認する。 【めあて】 二人の気持ちがなにでかわったのかまとめよう。	5	・一の場面と五の場面を比較し、登場人物の気持ちを読み取ることを確認させる。

2　教科書を読んで登場人物の確認をする ・教科書の五段落目を丸読みする。 ・登場人物を確認する。	5	・登場人物の行動に着目しながら音読させる。 ・本文の拡大コピーをホワイトボードに掲示する。 ・登場人物の挿絵を掲示する。
3　登場人物の気持ちを考える。 かえるくんとがまくんの関係性（親友） 	２０	・一の場面の「ふしあわせ」な気持ちを想起させる。 ・五の場面の「ふたりとも」という言葉に着目し、一場面の「ふたりとも」と比較してなぜ、かえるくんも同じ気持ちになったのか押さえておく。 【考えを持たせる場面での手立て】 ・考える時間の確保 ・考えの理由や根拠を持たせる。 【認め合いの場面での視点】 ・学級の雰囲気づくり（認め合える雰囲気を積極的に認め、誉める）
4　考えを発表し、意見をまとめる。 	１０	・挙手した児童から発表し、全員が発表出来るようにする。 ・発表した意見を名札を使い板書をしていく。 ・必ず全員が発表出来るように、一人一人の考えを持たせるように支援をする。 【伝え合う場面での手立て】 ・話し方名人・聞き方名人を示す ・なるべく全員が（一人一回）発表する。
5　本時の学習のふり返りをワークシートに書く。	5	○ワークシートで振り返りをさせる。 ○会話や行動から気持ちが想像できることに気づかせる。

〈表れてほしい児童の姿〉
かえるくんが手紙を書いたことで、二人ともしあわせな気持ちになってよかった。

（７）成果と課題

①主体的な学びについて

○ホワイトボードを使用することによって、児童が今までやってきたことを振り返りながらうまく登場人物の気持ちを読み取ることができた。

●ホワイトボードを使ったのは良いが、置いただけになってしまっているため、使いながら授業をすると良い。

②対話的な学びについて

○共通点や相違点を見つけさせることによって、自分の考えに自信を持つことができた。

●自分の書いた意見と違うことを書いた児童に対して、うまく支援することを考える。

③深い学びについて

○自分の意見を持つことによって意見交流することができ、しっかりとまとめる事ができた。

●二人の気持ちを深める所に時間をかけてしまって、音読まで行えるような時間配分が必要であった。